
超すげえの

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超すげえの

【Nコード】
N5483E

【作者名】
L i t t a l y

【あらすじ】
まじ、まじ超すげえの。あるんだって。まじで。ほんっとまじすごいから。まじで。

超すげえのが欲しい。

高級とか、レアとか、流行ってるとかそーゆうんじゃないくて。そんなみみっちいやつじゃなくて。

なんていうかな、こう、とにかくもう超すげえやつ。そうゆうのがほしい。

なんかね、とどかねえって分かりきってんのに、もうまじうんざりするくらいずっと空振ってんのに、まだとどいちゃう気がしちゃってんの。

何かに光をあてりゃ絶対陰りが生まれる。

照らし出されたその反対側に。

どんなに超強ええ光でこうカツと照らしてもその陰ってば絶対消えねえのね。

そうゆう種類の陰がこの世界にはある。

おれの中にも、もちろん、ある。

そしてあんたの中にも。

そういう種類の陰は音もなく俺たちを内側から腐らせるんだ。そして腐りきったらこうゆうの。

あの頃は若かった、って。

ジ、エンド。

だからおれの試みがうまくいく可能性は限りなく0に近い。

わかつてんの。

0, 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 %程度ならね、0 って事にしちゃったほうが楽だ。

うん、
確かに。

そんなものに振り回されるよか、とつと見切りつけて現実見れ
て話だ。

ボブデュランだってとくに諦めたし、ジョンレノンも墓の中だ。

でもね、おれ思うの。

0.0000000001%のものに触れたらそりゃあ確かにテラ奇跡だけど、

「0.0000000001%を望んじゃったおれっていう存在」も、

[illegible]

そう、俺ってばテラ奇跡。

存在がすでに神レベル。

うはすげえ

だからね。

俺は俺と対になるもの0.0000000001%を探し出す。

俺っていう人間が存在しちやつた程度には「ソレ」も在りえるから。

超すげえの。

そうゆう類のものに繋がってる糸をたぶんみんな最初は両手で握ってる。

超すげえのに繋がってる秘密の糸。

超すげえのを手繰り寄せるにはどう考えたって不釣り合いな細っこい糸。

だから、どっかでみんな片手をそこから離す。

こんなだけいつまでもアホみたいに握ってたんじゃ危ないつつて。

そして命綱にこっそり手を伸ばすんだ。

利き手と反対側の手をそっとね。

あっちは利き手でちゃんと握ってるから大丈夫だとか言っちゃってね。

すると陰は日増しに大きくなって、どいつもこいつもいつかそれに飲み込まれていく。

飲み込まれたってことに本人は一生気付かない。

そして飲み込まれると同時に、今度は飲み込む側になる。

余裕こいて、もしくはびびって片手離しちゃった自分の価値基準ややり方をさも正しいものであるかのように周りにも押しつけるようになる。

それが大人になるということだ、とか偉そうに言っちゃったりして。

そうやって子供たちの可能性をもぎ取っていく。

まだ形の定まらないものを自分の知ってる形に収めようとする。

自分の正しさで。

「別に否定はしないよ」とか「まあそうゆう夢を見る時期もあってもいいと思うよ」とか安っぽい詭弁並べちゃって、「理解」を示してはいるつもり。

でもそれは理解でもなんでもない。

ただの無関心。

本当の理解って超むつかしい。

真剣に向き合って、何年も何年もぶつかり合って語り合ってもなかなか理解なんて出来るもんじゃない。

「それもいいと思うよ、そーゆうのもありだと思うよ」なんて言葉は理解じゃなくて、むしろ無理解の最たるあらわれ方だ。

無関心なまま、無理解なまま、無責任な言葉を転がして上辺っただりくりするんだ。

あんたたちはいつだって。

そりゃあびびって片手離しちゃう奴らにとってはあんたの言葉ややり方が真理だろうよ。

確かにあんたらの側のほうが圧倒的に多い。

かなりの数だ。

ただ、だからといってすべてがあんたの側なわけじゃあないんだ。そうじゃない奴がこの世にはいるんだ。

離さなかったやつ。

片手でつかもうだなんて甘いこと考えなかったやつ。

ずっと両手で、全身全霊で挑んできたやつ。

そいつらには全く別の答えが存在する。

そしてそのことをあんたたちは知ろうともしない。

知りもしないまま可能性の芽を無遠慮に摘んでくんだ。

それも無意識のうちに。

俺は命綱に手のばす余裕あったらこっちの細っこい奴を両手でぎゅって握ってやろうと思う。

そんなくらいじゃないと「超すげえの」にはとどきっこないから。

片手じゃ「超すげえの」にもし出会えてもきつと対等に並べないから。

だから全賭け。

保険はいらない。

こんな考えあほくさい？ガキ臭い？

知ってるよ。

俺もおんなじふうなことほざいて人の願いを踏み潰したことたくさんあるから。

だから知ってる。

常識やらモラルやらを振りかざしてあれこれ値踏みする事のほうがよっぽどあほくせえってことも。

高尚な「大人な考え」とやらを掲げて人の情熱容易く笑い飛ばせる奴のほうがよっぽどガキ臭いってことも。

人にさんざんあほくさいだのガキ臭いだの言っ
て気づいた。そんな言ってる自分のほうがよ
っぽど程度低かったって。

俺とそっくりの真性包茎糞野郎どもに愛をこ
めて

FUCK

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5483e/>

超すげえの

2011年1月5日15時27分発行